

# 交通Bulletin

2004年4号

発行日：平成16年2月29日  
発行：日本大学理工学部社会交通工学科教室  
☎047-469-5239（教室事務）  
発行責任者：星埜正明  
編集担当：巻内勝彦・福田 敦・長井裕美子  
制作：株式会社 テイクアイ

DEPARTMENT OF TRANSPORTATION ENGINEERING AND SOCIO-TECHNOLOGY · COLLEGE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY · NIHON UNIVERSITY

## ■ CONTENTS ■

教室の動き .....	2	学科を取り巻く近況 .....	10
教員のアクティビティ .....	5	原稿投稿のお願い .....	12
学生のアクティビティ .....	8	編集後記 .....	12
卒業生からのメッセージ .....	9		

## 授業評価への期待

助教授 福田 敦

今年度から、全ての教員が担当する講義科目の内の一科目について、授業アンケートを実施することになった。授業アンケートの実施については、以前より教員の間で賛否がある。主な反対意見は、そもそも学生が教員の講義を評価すること自体が誤りであるとするものや教員の人気取りになり学生に好かれるために教育内容を下げる結果になるとするものなどである。

今回の授業評価アンケートでは、質問項目20の内11が講義と教員に関するものであるが、前期の集計結果を見る限り、交通の先生の評価は学部の平均より高く、自由記述欄にも殆どコメントが書かれていないので安心したが、一方で多分学生も気を使っているのか、あるいは変なことを書くと先生に嫌われると思ったせいかもしれないと勘ぐったりもする。独自に私がやっている他の講義でのアンケートでは、「なぜ講義に遅れてくる」とか「休講や代講が多いのはなぜか」などと書かれていることもあり、正直言って良い気持ちはしないし、なぜそうなったか説明ぐらいさせてくれという気持ちにもなる。しかし、冷静に考えて見ると低学年の学生にとって講義時間がキャンパスで過ごす時間の大半であり、講義の中での教員の「一寸」が学生にとっては結構大きな問題であり、この点を教員側が認識できるという点では授業評価アンケートの意味は大きい。

ただし、これは教員側の話で、学生がこの授業評価アンケートという仕組みを評価するかどうかは、その結果の活用に掛かっている。ここ数年 JABEE の審査員として幾つかの大学の審査に関わってきた。審査に行った殆どの大学で授業評価アンケートに類するものが行われているが、学生とのインタビューを行ってみると、これに対する学生の評価が大学によって大きく異なることに気がつく。概して評価が良いのが、授業評価アンケートの結果に対して講評会などを行い教員側もどこを改善するか学生にフィードバ

ックしている大学で、授業評価アンケートを実施したまま何もしていない大学では評価が低い。前者の場合は、小さなこと、例えば、先生が黒板に書く字が大きくなったというようなことでも非常に評価されている。一方、アンケートに書いたのに改善されないということに関しては、学生は不信感を強めるようである。

ただし、忘れてはいけないのは、授業評価アンケートが上記のような機能を果たすためには、成績の評価の方も公正で適切なものでなければならぬということがある。そうでないと、最初に書いたような人気取りになってしまう可能性は、拭いきれない。

実は、私自身は十数年前にアジア工科大学で教えていた時に授業評価を体験したことがある。これはかなり欧米式で学生組合が実施するもので、毎学期必ず全ての講義の中で授業評価アンケートが行われ、全員の結果が1冊の報告書にされ閲覧されるというものであった。設問は、話している英語が良く分かるかというものから始まるので、毎回恐る恐る自分のページを見たことを記憶しているが、確かに、自分の講義の進め方を見直す良いきっかけではあった。その一方で講義の評価は皆厳しく、教員全員で会議を開きチェックし、合格しない学生は情け容赦なく落第にする仕組みになっており、全体としてバランスが取られていた。

そういう意味で、授業評価アンケートは教員にも学生にも結構厳しいものであるが、上手く使えば、教員と学生がお互いに何を考えているか理解をする助けとなり、教育環境を改善していく良い道具となる。学科でも、現在 JABEE の受審に向けて、授業評価アンケート結果の取り扱いの検討を進めているところである。学生の皆さんにも、是非授業評価アンケートの役割を理解してもらい、学科の改善を進めていけることを願っている。

# 教室の動き

本年度の主な教室の教育関連行事の概要を報告します。

## 交通現象解析Ⅰ「下田合宿」

藤井敬宏（交通現象解析Ⅰ担当）

本学科では、学科創設時からの伝統行事として合宿形式による屋外実習を約40年間続けています。この下田合宿は、平成13年度より3年生の専門必修科目である「交通現象解析Ⅰ」の交通調査の演習として実施し、本年度で3年目を迎えました。

交通現象解析Ⅰは、各種交通実態調査を集中的・総合的に行うことで、交通技術者を目指す学生が、交通現象を一貫した捉え方で把握し、調査地域の交通の特徴と問題点そして改善点を探り、地域社会に貢献し得る調査技術を習得することを目的としています。

本年度の下田合宿は、9月19日(金)～22日(月)の3泊4日、学科教職員17名、調査補助として大学院生12名、学部4年生3名、研修生1名のスタッフ33名と、学部3年生144名の総勢177名にて行われました。合宿は、伊豆急「踊り子号」にて下田に到着し、自分たちの足で調査地点となる町の中を歩くところから始まりました。調査地点を確認し、町並みや生活の様子などの地域の特徴を肌で感じ、この地の文化・歴史を知るために、「下田市の歴史資料館」を見学、そして夜には、元下田市役所建設課長の進士さんから「下田の地勢と歴史」の講演を行っていただきました。

調査は、①国道の主要交差点の交通容量調査、②主な路外駐車場や旧市街地内の路上駐車の実態調査、③下田市内の交通の円滑性を評価するためにタクシーを借り上げて行う旅行時間調査、そして、④旧市街地を囲んで設定したコードラインにおける車両番号照合法調査、の4つの調査を実施する予定でしたが、台風の接近により①と③の調査しか実施できない状況でした。しかし、一般的に雨が降ると車の走行速度が減少しますが、台風接近に伴い交通量が激減し、昨年度調査結果より平均速度が約5km/hほど高くなったこと、また、トンネル部では風雨を避けられたため、晴天時に速度が15%低下していた状況が、5%程度の速度低下に留まったことなど、台風接近時の貴重な交通データを収集することができました。

現在、学生たちは、過去のデータと今回の調査データの解析を行っています。これらの交通現象の比較結果から、下田市の交通改善に寄与し、社会に還元できるような提案がなされることを大いに期待しています。

## 就職懇談会2003

安井一彦（3年生担任）

平成15年12月13日(土)、船橋校舎において、企業で活躍してい

る卒業生の方16名に講師をお願いし、平成15年度就職懇談会を開催しました。会では、次年度就職希望の学生を対象に、業界の話題、就職に向けてのアドバイスなど、大変貴重なお話をさせていただきました。

参加した学生は、次年度の就職活動に向けて真剣にお話に耳を傾けていました。

終了後はファラデーホールにて懇親会を開催しましたが、卒業生を囲んで熱心に質問する学生など、大変有意義なイベントであったと感じています。卒業生の方々には、今後とも当学科の就職活動につきまして、さまざまなご支援をお願い申し上げます。

### 平成15年度就職懇談会講師

日暮 一正 富士通 FIP ㈱

畑野 敏久 ㈱フジタ

宮田 真之 タカハタ建設㈱

山本 浩之 ㈱日本構造橋梁研究所

越川 裕康 ㈱日本設計

黒木 幹 東京エンジニアリング㈱

今井 裕敏 ㈱伊藤水道

小高 武 ジオスター㈱

飯田 泰司 ㈱ライテック

内田 将玄 ドコモ・システムズ㈱

田島 隆之 ㈱京三製作所

武田 嘉雄 東日本旅客鉄道㈱

西野 健 帝都高速度交通営団

星川健太郎 警視庁交通捜査課

石山 静樹 日本道路公団

早川 勇 新東京国際空港公団 (敬称略)

## 入試フォーラム・オープンキャンパス報告

小早川 悟（オープンキャンパス連絡委員）

入試フォーラムは7月20日(日)に駿河台キャンパスで、オープンキャンパス2003は8月3日(日)に日本大学理工学部船橋キャンパスにて開催されました。

駿河台キャンパスの入試フォーラムでは、巻内教授と峯岸助手による学科説明、藤井助教授と安井専任講師によるミニ講義が行われ、当日は50名近くの参加者に訪れていただきました。船橋キャンパスでのオープンキャンパスでは、伊澤教授・福田助教授・江守助手によるミニ講義がそれぞれ行われ、体験コーナーにおいては「交通バリアフリー体験」「模型・パネル展示」「ネット単」「透水性舗装実験」「紙の橋」など、屋外においては

「前方遮断走行実験」「コンクリートカヌー」などの実験を体験してもらいました。本年度の社会交通工学科の会場での参加者数は、昨年度よりも減少してしまいましたが、入試フォーラムとオープンキャンパスの両方を訪れてくれた高校生など熱心な受験生も数名おりました。また、各先生方が分担して行っている高校訪問での学科説明を聞いて、興味を抱いてオープンキャンパスに参加してくれた高校生もいて、学科広報と連動してオープンキャンパスを実施していく必要性を感じました。

昨年と同様に、オープンキャンパスの実施に際しては、31名の学生がボランティアとして協力してくれました。今後も、学科の活動内容の活性化やカリキュラムの改良とあわせて、地道な広報活動を実施していかなければならないと感じています。

## スポーツ大会報告

安井一彦（3年生担任）

平成15年11月29日(土)、船橋校舎において1年生～大学院生まで全学年参加の学科スポーツ大会が開催されました。当日、あいにく豪雨となり、屋外での種目（サッカー、ソフトボールなど）が中止となりましたが、スポーツホールで屋内競技の熱戦?が繰り上げられました。

終了後、13号館食堂において懇親会が開催され、スポーツ用品が当たる抽選会など大いに盛り上がり、今年のスポーツ大会が終了しました。幸い、今年は1人の負傷者も出ずに終了し、安堵しています。

## 学科協議会報告

柳沼善明

「社会交通工学科協議会」は、学科の将来計画について適切な助言を行い、学科の発展に寄与することを目的に平成4年6月に当教室の付託を受けて設立されました。協議会の委員は、学識経験者から6名以内、卒業生から6名以内、教職員から3名以内です。

協議会は平成15年3月27日に開催されました。協議会委員の一部交代により、会長に佐丸氏、副会長に星塾教室主任が選出されました。副会長の深川氏は留任です。

開会に先立ち、新会長の佐丸氏より「現在の建設業界における新設の公共事業の減少にともない、保守・改修が主となってくるであろう時代に、民間を経営している立場から、学科のあるべき方向性に対して提言し、学科の発展に貢献していきたい」とのご挨拶がありました。

協議会では、以下の議題について協議会委員からの質疑や多くの貴重な提言をいただきました。議題は、①協議会会則の一部改正、②教室の現況（学科の学生数、教職員の退任・新任、非常勤講師の紹介、学科行事など）、③カリキュラム、④入試状況、⑤就職状況、⑥今後の学科活性化、です。

### 現在の協議会委員一覧

学識経験者（五十音順）

秋山 哲夫	東京都立大学	教授
景方 尚之	㈱日本土木工業協会	
小浪 博英	東洋大学	教授
佐丸 雄治	ライト工業㈱	代表取締役社長
中村 良夫	東京工業大学	名誉教授
松田慎一郎	日本大学	理事

卒業生（卒業年順）

水間 雅昭	㈱国際航業	
深谷 俊恒	㈱横川技術情報	
深川 章	自由国民社	
丸山 誠	㈱大林組	
高橋 俊一	セントラルコンサルタント㈱	
吉野善二郎	東芝物流㈱	

学内教職員（五十音順）

中山 晴幸	日本大学理工学部社会交通工学科	専任講師
星塾 正明	日本大学理工学部社会交通工学科	教授
柳沼 善明	日本大学理工学部社会交通工学科	教授

敬称略

## 新任教員・非常勤講師の紹介

下辺 悟

■平成15年度 新任教員

（資格・氏名、生年・出身地、学歴・経歴、学位・専門分野）

助教授 轟 朝幸

1964(昭和39)年生・長野県長野市出身  
長野県立長野高等学校－日本大学理工学部交通土木工学科－同大学院理工学研究科交通土木工学専攻博士前期課程－同博士後期課程－日本大学助手－東京大学助手－同講師－高知工科大学助教授

博士(工学)・専門：交通計画、地域計画

助手 岸上 明子

1974(昭和49)年生・香川県観音寺市出身  
香川県立観音寺第一高等学校－東京外国語大学外国語学部東南アジア語学科－国立フィリピン大学大学院都市地域計画専攻

Ph.D. in Urban and Regional Planning・専門：都市計画、地域計画

副手 川西 崇行

1971(昭和46)年生・東京都台東区出身  
東京都立日比谷高校－慶應義塾大学文学部哲学科－東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程－早稲田大学地域社会と危機管理研究所研究員  
修士(工学)、専門：都市計画(都市史)、都市法

副手 野水 雅之

1979(昭和54)年生・千葉県沼南町出身

柏日体高校-日本大学理工学部交通土木工学科

専門：交通流、交通制御

■平成15年度 非常勤講師

(氏名・担当科目、本務先・学位・資格)

・大学院

- 新井 洋一 交通施設工学特論V
石橋 忠良 交通施設工学特論VI
大岡 哲 交通施設工学特論VII
太田 勝敏 交通計画特論IV
清野 茂次 交通施設工学特論VII
室町 泰徳 交通計画特論III
森田 緯久 交通工学特論I・II
森地 茂 土木計画学特論

・学部

- 阿部 絢子 土木関連行政
綾木 修二 開発プロジェクト
井上 寛美 軌道工学
伊村 則子 都市防災
岩佐 行利 都市衛生
内田 滋 交通現象解析I
大久保亮夫 交通生理・心理学
荻津 修 構造デザイン
加藤 三郎 環境循環工学
川口 利之 製図、景観設計
木戸 伴雄 交通現象解析I・II
木村 克正 構造設計
是枝 孝 港工学
佐田 達典 測量学、空間情報工学
佐野 充 都市地理学
関 太一 開発プロジェクト

- 高島 敏夫 構造設計
對木 揚 都市計画I
中村 英夫 交通総論
西村 浩 景観設計
二村真理子 交通経済学
松村 英樹 構造設計
三島 研二 測量学、測量実習
水間 雅昭 建設マネジメント
森下 庄三 開発プロジェクト

新設科目紹介「空間情報工学」 佐田達典

筆者は15年度に新設された「空間情報工学」の授業を非常勤講師として担当している。本稿ではその概要について紹介する。

まず、空間情報工学という学問分野について簡単に説明したい。測量というと古色蒼然とした印象があるが、実は近年大きく技術革新が進んだ分野の一つである。実務では既に旧式のアナログ測量機が姿を消し、デジタル測量機による計測とCADシステムによるデジタル処理が一般化している。また、衛星を利用したリモートセンシング(RS)や汎地球測位システム(GPS)、さらにデジタル地図に基づく地理情報システム(GIS)が急速に実務へ浸透し、測量に関連する学問領域としても中心的役割を果たすようになった。このような時代の変遷の中で従来の測量学の枠を超えた学際的な学問分野として提唱されてきたのが空間情報工学(Geoinformatics)である。

筆者は新設の「空間情報工学」を既設科目の「測量学」を補完し学際的な視点を盛り込む科目と位置づけ授業を行っている。扱っている技術は前述のRS、GPS、GISに加え、電子光学測量、写真測量、数値地形モデルも対象としている。学部2年での授業であるので各技術の概要を学生に理解してもらうことに主眼をおき、基本的な原理と用語の修得を目指している。授業では学生が技術のイメージを把握しやすいように計測機器や実務での利用例を適宜紹介している。一方、学生には自分が興味を持った技術について実社会での利用例を調べてレポートを作成する課題を与えている。今回提出されたレポートをみると調査分野が交通、環境、資源、情報通信など多岐にわたっており、学生諸君の関心の広がりを感じることができた。

初年度である今回は手探りの状態で授業を進めてきたが、学科の先生方のご協力を仰ぎながら終了することができた。紙面を借りて御礼を申し上げる次第である。

教員のアクティビティ

本年度の教員の学内外での特徴的な活動状況をピックアップして、主なものを下記に報告します。各教員の一年間の研究業績と社会的活動の一覧は、次号に一括して収録する予定です。

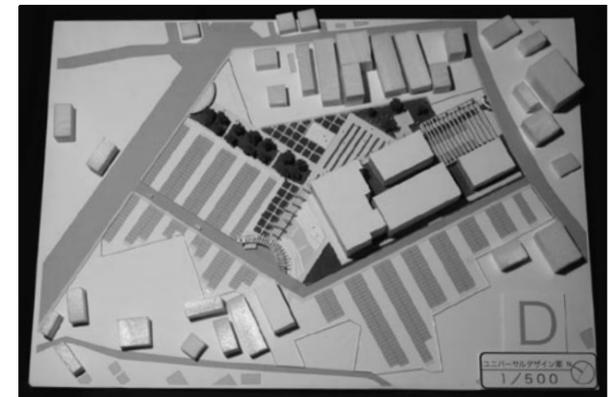
学外活動を通してデザインのワを広げる

デザイン研究室(文責:伊澤岬)

■「交通バリアフリー法の継続プログラムの展開」

交通バリアフリー法に基づき、昨年度、当研究室では八千代市の交通バリアフリー法基本構想策定をサポートし、本年5月に国土交通省に提出しました。今年度はさらに基本構想の事後展開とはどうあるべきかを地元NPOの協力を得て、ワークショップの開催によって試みた。テーマは、市庁舎をモデルに今後の市内におけるユニバーサルデザイン対応の方向性を、市民と共に構想を立案することとした。またワークショップは「特別講義」の授業の一環と位置づけ、積極的な学生の参加を求め、当日は30名を超える受講生が運営をサポートした。

構想を立案するにあたり、交通の学生を中心に3つの案をビジュアルにまとめ、提示し、市民からはタクシー、



最終案として提示した提案模型



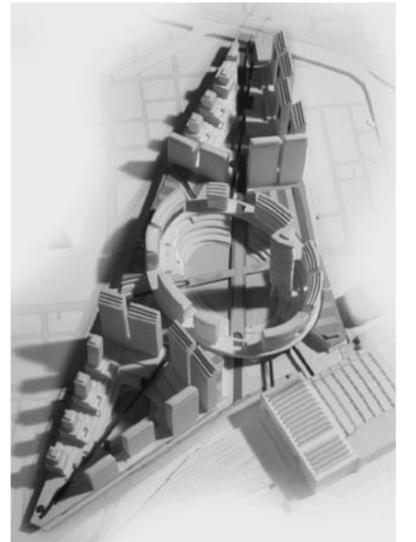
模型を使って提案を説明する学生

シャトルバス、コミュニティバスの活用促進や駐車場面積の削減要望などの活発な意見とともに議論が展開された。さらにこのような市民活動をどのようにアピールしていくかなど、市民の側からの積極的な展開が見えたことは有意義であったと考える。WSを全三回(10/4、11/8、12/6)行ったが、この活動は基本構想策定後の継続的事業(フォローアップ事業)として八千代市に正式に位置づけられ、行政内の意識向上に貢献できたと考えている。さらにこの活動は、交通エコロジー・モビリティ財団の交通バリアフリー推進事業としても決定されている。

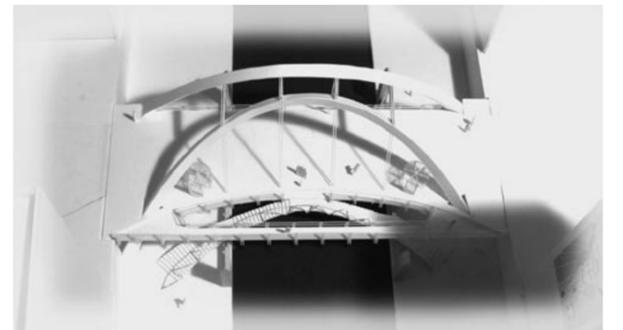
今回は「建築」の内部についての検討を盛り込めなかったが、今後の福祉的環境整備を交通バリアフリー法という土木の視点でのみ捉えるのではなく、建築のハートビル法、また福祉のまちづくり条例の都市的な視点から捉え、バラバラの法整備の再構築が必要と考え、研究を進めたいと考えている。

■「土木系デザインコンペティションへの参加」

大阪駅北地区国際コンペは52の国及び地域から966点が参加し、『コロセウム』を中心に劇場都市を環境と交通システムの中に提案した。この「大阪劇場都市構想」を含む55作



大阪コンペ模型写真



戎橋コンペの模型写真

品が最終審査に残り、原宿ハナエモリビル TN プロープで6月28日から1カ月、作品展が開催された。また9月30日には、大阪・ミナミの阪神タイガースの優勝でファンがフィーバーした橋が、老朽化のため建て替えが求められ、この橋を大阪の新たな祝祭空間として親水性と人の滞留性を主眼に提案したが、惜しくも落選。

#### ■「まちづくりの講演」

10月29日に鳥根県松江市の松江商工会議所が主催した講演会において「水辺空間を生かした都市のデザイン」と題し、「出雲・水の回廊構想」(1997年修士設計：早瀬貴志)と水網都市松江の将来について講演を行った。また12月1日には秋田県秋田市仲小路振興会が主催するまちづくり勉

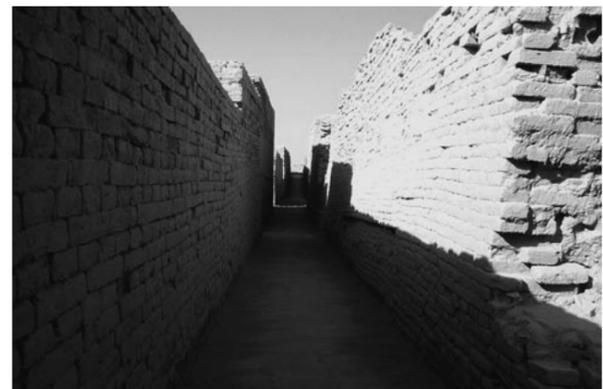
### モヘンジョダロの煉瓦も“イギリス積み”？ 理工学部海外派遣制度・サバティカル制度の 成果報告

伊東 孝

昨年の8月から10月の3カ月間、理工学部海外派遣制度およびサバティカル制度を利用して、なかなか行けなかったペルー、メキシコ、エジプト、パキスタンの古代遺跡を急ぎ足で見学した。テーマは、古代の都市インフラ施設と石や煉瓦の組積造がどのようなものであったのかを確認すること。ガイドと喧嘩をしながら、また足にマメをつくりながら、炎天下を歩き回った。靴も音をあげ、両足の靴とも裏底がはがれてしまった。

旅行中の失敗談やエピソードはいろいろあるが、盗難や危険な目にあうこともなく、無事旅行を終えることができた。具体的な内容については別の機会にゆずるとして、ここでは、使い古されているが真実を言い当てている「百聞は一見にしかず」のひとつの成果を簡単に紹介してみたい。

まずは組積造のこと。煉瓦積みには大きく分けて、フランス積みとイギリス積みがある。わが国では、フランス積



モヘンジョダロの細街路

強会にて「秋田のまちづくりと仲小路」と題し、冬季対応型の都市とバリアフリーのまちづくりのあり方を市民参加の視点から講演した。

#### ■「卒業設計+研究室作品展の開催」

平成14年度の卒業設計を中心に、デザイン研究室では初めてとなる、卒業設計展を研究室の作品展と併設で行った。2003年5月5日～7日の期間中、船橋日大前駅ギャラリーにて開催し、130人の来場者であった。マスコミにも広く紹介され、日刊建設工業新聞4月25日号では写真入りで、また土木学会誌、日経コンストラクション誌にも紹介された。

みの構造物はイギリス積みより古く、建造物の竣工時期の判定指標のひとつにも利用されている。フランス積みの構造物は、一般的には幕末から明治10年代につくられ、またイギリス積みは明治10年代以降、関東大震災以前につくられたとされる(フランス積みは、煉瓦の長手と小口を水平方向に交互に並べたもの、これに対しイギリス積みは上下方向に交互に積んだものである。またイギリス積みは、コーナーの収め方でオランダ積みとよばれるものがあり、日本ではイギリス積みといいながら、実際にはオランダ積みの構造物の方が多いといわれる)。

イギリスやフランスにある煉瓦建造物をみて以来、呼称自体にも疑問をもっていたのだが、今回、モヘンジョダロの煉瓦積みをみて、あらためて「イギリス積み」という呼称に疑問をもった。モヘンジョダロやハラッパの煉瓦は、積み方からいえば純粋なイギリス積みだったのだ。また、エジプト最古のピラミッドとして知られるサッカーラの階段式ピラミッドの切石も、積み方はイギリス積みであり、コーナー部は日本の城郭石垣のように大きな切石の長手方向を交互に積んだ算木積みであった。要するに、組積造の技術は、今から4600年前にすでに確立されていたことがわかる。日本でいえば、それは縄文文化の時代にあたる。



モヘンジョダロの幹線街路

交通システムの考え方も、新発見をした。それは、歩車道分離と居住環境地域の考え方である。歩車道分離の考え方は、一般的にイギリスのブキャナンレポート(TRAFFIC IN TOWNS, 1963)が嚆矢とされる。ブキャナンは、そのヒントを水上交通と陸上交通が立体的に分離されているイタリアのベネチアから得た。しかし今から4300年前、モヘンジョダロでは、すでに牛車の通る幹線街路と人が主体の細街路とに分け、しかも家の出入り口は幹線

#### 交通管理技術移転のための調査に参加して

安井 一彦

平成15年8月31日から9月5日まで、警察庁委託の「交通管理技術移転のための調査」のため、インドネシアのジャカルタを訪問しました。

調査の目的は、インドネシアの交通管制システムの現状、課題、そして将来の方向性についての調査です。在インドネシア日本大使館と意見調整の上、ジャカルタ国家警察、ジャカルタ警視庁、運輸省、居住・地域基盤整備省、ジャカルタ特別市交通運輸局などを訪問し、専門技術者と意見交換を行いました。ジャカルタの交通管制システムは、警察ではなく、ジャカルタ特別市交通運輸局が運営しており、ジャカルタを3つの地域に分割し、シーメンズ、オーストラリアのSCAT、スペインのシステムが導入されていました。しかし、数少ない車両感知器もそのほとんど

#### 巻内勝彦教授が経済産業大臣賞受賞

地盤工学研究室

巻内勝彦教授が長年にわたる我が国の工業標準化への功績が認められ、平成15年10月14日「平成15年度 工業標準化事業表彰式」において工業標準化事業功労者として中川昭一経済産業大臣より「経済産業大臣賞」を授与されました。

主な功績と致しまして、地盤基礎分野の土質試験関係のJISの制定及びISO/TC221(ジオシンセティック)の国際標準化への貢献などが挙げられます。巻内教授は経済産業省日本工業標準調査会(JIS)土木技術専門委員会委員をはじめ、同省土木技術専門委員会企画ワーキンググループ

#### Best Paper Award の受賞

交通システム研究室

福田先生が、昨年1月に開催された36th Annual Hawaii International Conference in System Sciences の Decision Technologies for Management 部門で、Best Paper Award を受賞されました。論文タイトルは「Testing Design of a

街路側にはつくらせなかったのである。貧富の差はあったが、王権のなかったインダス文明で格子状の街路パターンが生まれたことも、現代に通じる民主的な都市文明があったのではないかと注目されている。

最後になりますが、今回このような貴重な機会を与えていただいた理工学部および学科教職員の皆さまに、誌面を借りてお礼を申し上げます。

は故障しているというのが実態でした。また、日本では絶対にあってはならない信号灯器の玉切れも日常茶飯事であり、それを修理する技術者すらもないのが現状です。しかし、若手の交通技術者は、交通問題の改善に対して非常に熱心、かつ意欲的であり、その面では非常に救われた感じでした。

今、日本にできることは、円借款などで金銭面の補助をすることも重要ですが、勉学意識の高い優秀な若手技術者を日本に招き、交通工学の教育支援をするようなプロジェクトが是非必要であると感じました。それにより、将来日本とインドネシアの関係はより一層親密なものになると確信しています。

なお、ジャカルタ滞在中は、当学科で博士号を取得した、Bambang S. Pujantio 博士とお会いし、さまざまな情報交換を行いました。

委員、(社)地盤工学会理事、同基準部長、同 ISO 検討委員会委員長、同ジオシンセティックス国際標準対応委員会委員、(社)土木学会 ISO 対応特別委員会幹事兼委員、同細粒分の境界粒径に関する検討小委員会委員長、(社)電気設備学会電力用ケーブルの地中埋設の施工方法 JIS 改正原案作成調査委員会委員長、(社)日本規格協会ブロック舗装用繊維材料の性能評価方法の標準化委員会委員長、(社)日本建材産業協会 ブロック舗装用繊維材料の性能評価標準化ワーキンググループ委員長など規格、基準に関連する委員会活動を長年行っておられます。

なお本年度は、工業標準化事業功労者は30名、工業標準化貢献事業者は4団体(土木学会を含む)・1企業でした。

Social Innovation: The Environmental Mitigation Banking System」で、総長指定研究「環境と資源の安全保障」の中で開発したミティゲーションバンキングに関するSDモデルについて Worcester Polytechnic Institute の Khalid Saeed 教授と連名で発表されたものです。受賞論文は、約700件の発表の内10件で、本論文はその内の1件でした。

# 学生のアクティビティ

## 日本建築学会設計競技・九州支部入選 第17回建築環境デザインコンペティション・佳作



田島敬悟（大学院2年）君が、新建築社の後援の下で行われたプロの建築家らを対象とする第17回建築環境デザインコンペティション（主催 東京ガス株式会社）課題「まちを活性化させる駅」において応募総数300作品の中から入選17作品の

佳作賞に輝きました。作品はシステム、施設提案の多い中、都市的スケールで観光地として有名な福岡県の柳川を舞台に、「駅は駅舎でなく都市である」を切り口に駅から都市の活性化を提案しました。また、2003年度日本建築学会設計競技、課題「みち」において応募総数288作品の中から支部入選65作品の九州支部入選を果しました。作品は、水郷柳川を対象に水辺都市において重要なポイントであるリバーウォークについて柳川の魅力的な特徴を活かし、連続性のある道の提案を行いました。

## 土木学会第58回年次学術講演会 優秀講演者賞の受賞



赤松秀彦（大学院2年）君が土木学会第58回年次学術講演会において優秀講演者賞に輝きました。同賞は、論文内容が優れていて、かつ簡潔明瞭で優れた講演を行った40歳以下の若手研究者・技術者に与えられる賞です。論文のタイトルは、「石神井公園駅前におけるポケット・ローディング・システムの利用実態分析」です。発表では、路上駐車、特に荷物の積みおろしを行う貨物車についてポケット・ローディングを設置することで貨物車による路上駐車削減を図れることを示し、ポケット・ローディングの有効性について報告しました。なお受賞者は、講演数4,011編の中から254名でした。

## 特別研修生の受け入れ

高田邦道

警視庁では新しい時代の警察官像を模索している。そのひとつに専門制の確立がある。交通安全・交通制御・交通規制など交通部門もその対象になっている。技術の専門として「交通工学」という試験区分で採用する独自の制度をつくった。次なる方法として、警察官の交通技術の研修取得を打ち出し、その研修先として本学部本学科を指名して打診があった。

ところが、受け入れの方法がなく、その受入制度（特別研修生に関する取り扱い）を新設するのに1年を要し、難産の末、2002年4月から町田浩司氏が選抜されて派遣されてきた。一方、警視庁の方も予算化が十分でなく、学会参加の費用など

多々課題があった。結局、町田氏の成果をみてからと、この制度は動き出した。その後、2003年4月から古郡茂忠氏が派遣され、現在研修中であり、まずは成功とみてとれる。

世の中は、産官学の連携が叫ばれているが、いざ正式にことを運ぼうとするとこのような障害が多く、多くの場合、挫折してしまう。この制度が長続きするためには町田氏と古郡氏の今後の働き如何である。また、両名は、それを十分受け止め得る人物であり、受け入れ側も期待している。

しかし、何分にも1年の研修期間は長いようであっても短い。交通管理者が交通技術をどう扱えばよいかのイロハのイが分かった程度だと思うので、本学科の研究室ならびに卒業生の後押しが今後必要である。そのことが、研修の効果を大きくすることになるが、その成果が分かるには長い年月を要する。この制度の繁栄と継続を期待したい。

## 研修生紹介

古郡 茂忠 氏



警視庁都市交通対策課から研修生として昨年4月から高度な交通工学に基づく調査、分析手法と対策に活用すべき最新の技術を習得するため、交通計画第二研究室（高田研究室）に在籍しています。

私は、昭和63年に警視庁警察官となって以来、交通を専門的に経験したことはなく、交番で交通の指導取り締まりや交通事故処理など取り扱いを通じて交通に携わった程度で交通を勉強するのは今回の研修が初めてでした。

大学での研修は、当初は、緊張していたせいか時間が長く感じられていましたが、日を追うごとに時間が短く感じられるようになりました。講義、ゼミでは、交通の知識があまりない私にとっては、見聞きするものに新鮮さがあり、とても充実していたと思います。

また、夏期合宿ゼミ、交通現象解析等にも参加させてもらい、学部生などが卒業論文や実習に一生懸命に取り組む姿勢を見て、私もこの研修を実のあるものとしなければと思いを強くしました。研修も残りわずかになりましたが、交通についてより多くの知識や技術を習得できればと思います。

研修の最初に高田先生からこの1年間で交通のイロハのイくらい分かれればいいと言われたのを思い出します。交通を知るに従って交通の難しさを痛感しているところです。

今後は、警察で交通管理という立場で長く携わっていくこととなりますが、交通は奥が深く日々勉強しなければと思います。研修で学んだ知識、技術を生かして都市交通対策課において交通事故、交通渋滞、違法駐車、交通公害等道路交通に起因する諸問題を解決するために取り組んで行きたいと思います。

# 卒業生からのメッセージ

学科の卒業生はすでに5,000名を超えています。

大学の諸改革が進む中、そのひとつとして、同窓会「わだちの会」、校友会、学科教室はそれぞれの組織が相互協力体制を強め、連携を深める努力をしています。

本号では、各方面でご活躍の卒業生有志の方々から、学科や在学生へのメッセージとして自由なご意見などをご寄稿していただきました。

## 「社会人を1年経験して」

池上雄一（39期卒）  
東洋エクステリア㈱

私が就職した会社は、エクステリアという分野のメーカーです。エクステリアとは、皆さんがよく知っているインテリアの逆側で、家など建物の外回りのフェンス、門扉、カーポートなどのすべての物をいいます。この業界は土木分野に近いものはありますが、皆さんが今学んでいる土木とは少し違うものだと思います。

私が今している仕事は開発職です。私は入社後フェンスの開発チームに入り、10月に新製品として発売しました。製品を開発していく上で強度を計算するために必要な知識は、応用力学でした。

皆さんが今まで学んだこと、今学んでいることは、どんな分野に進んでも決してマイナスになることはないと思います。

社会人となると、今までの学生生活とは違い、いろいろなことがあります。自分が満足・納得できることをやっていないと、がんばれないと思います。だから、自分がやりたいと思える仕事をきちんと考えてほしいと思います。まだ自分のやりたいことがはっきりしてない人は、いろいろな会社の説明会に参加したり、両親や先輩の話を聴いたりするのもいいと思います。就職活動をきちんとすれば、他の人よりきちんと自分のことを考えられると思います。そして少し早く、社会人に成長できると思います。

まだまだ就職難は続いていると思いますが、がんばって自分の納得のいく結果をつかんで下さい。

## 「社会人を1年目として」

金山拓郎（37期卒）  
新宿区環境土木部道とみどりの課

私は学部と大学院合わせて6年間社会交通に在籍し、現在では新宿区で地方公務員として働いています。つい1年前はまだ学生で研究室生活を送っていたのですが、最近で

は大学にいたことがかなり前のことのように思われます。しかし、船橋校舎での6年間は私にとって、今の自分を形成するのにとても重要なかけがえのない期間だったと感じております。

昨年土木職として新宿区に入区し、現在区内の緑化推進事業を担当させていただいております。まだ1年目ですが、結構色々なことをやらせてもらっていて、最近の事業では区内の小学校の屋上に花壇を作ったり、幼稚園の園庭を芝生にする仕事等を担当しています。

そのように、交通で6年間勉強してきましたが、今は交通とは正直言ってほぼ全く関係無い仕事を行なっているのが現状です。おそらく他の交通の卒業生でも、交通とは無縁の仕事をしている人が多いのではないかと思います。ですが、学生の時に経験したことや学んだことで仕事の役に立ったことはいくつもあります。私の場合では、大学院時代に論文をまとめたり、学会等で発表した経験が多いに仕事の上で役立っていると思っています。どの仕事でもプレゼンをしたり報告書をまとめるようなことがあり、そんな時に学生の時分に経験していたことが生きています。ですから、学生達には何をやるにも真剣に全力で取り組んでもらいたいと思います。どんなことでも一生懸命やったことは、必ず何かの役に立ちます。日々の授業や実験、また卒業研究など大変な事だとは思いますが、是非全力で取り組んでいってほしいと思います。

最近の世の中は今まで当たり前だったことが次々と変わり、地方公務員の仕事の世界でもそれは例外ではありません。これからは、常に新しく変えていこうとする意欲と鋭いセンスを持つ人が公務員にも求められていると感じています。また、我々の世代が上昇思考を失っては世の中良くはなっていけないと思います。高い意識を持った後輩がいつか私の職場に入って来てくれることを願っております。

## 役所の土木技術職員に求められていることに関する一考察

栗田隆広（32期卒）  
埼玉県県土整備部技術管理課 技術管理担当 技師

私は交通計画系の研究室にいたので、正直なところ、構

造や施工の分野は得意ではない。しかしながら、警察関係や一部の町村を除いたほとんどの役所では、土木技術職員としての採用となる。この意味するところは、ある程度、専門性を捨てざるを得ないということ。本当にこの分野の仕事がしたい、というこだわりがある人には、役所の仕事はオススメできない。

役所の土木技術職員の仕事の分野と種類は、多岐にわたる。前者は、道路・河川・砂防・ダム・公園・上下水道・都市計画など、後者は、調査・測量・設計・積算・監督・用地交渉・苦情処理、などである。

私は埼玉県に採用されて最初の3年間、土木事務所で治水砂防事業を担当した。河川の仕事って何？というところから始まり、右も左もわからないうちに一人で事業の大部分を任されることになる。ここで求められたことは、やはり「技術」である。そして現場の暑さ寒さに負けない体力、時に理不尽な、時にごもつともな、住民からの苦情に逆切れしない忍耐力。いずれも自分に不足しているものばかり。

その後現在の職場に異動するわけがあるが、今度は全く毛

## 学科を取り巻く近況

学科名称が社会交通工学科となって3年、280単位以上に膨らんでいた学科設置単位を190単位にシェイプアップした新カリキュラムが始まって2年が過ぎました。

入試、就職とも一段と厳しい状況ですが、このような状況に負けないよう教員一丸となって努力をしております。

## 1年生の活動報告

本年度入学の1年生からJABEE対応の一環として、キャリアチャートという入学直後に自分の学習目標や将来の進路を学生自身が記入して、自己計画やその達成度を検証することを目的としたシートを運用するという新しい試みを始めました。在学中の目標や将来の進路を早い段階から真剣に考えることにより、低学年次からの将来のビジョンの明確化、学習へのモチベーションの向上や動機づけの強化を行っております。キャリアチャートは卒業時まで毎年更新するため、前年度の自己点検および次年度の更なる自己計画を建てる仕組みとなっています。学生を数名ずつ集めて、キャリアチャートを運用する意義や活用方法などについて十分に説明をした後、配布しています。その際、学生生活で困ったことや、学部や学科、教職員への要望などを自由に発言できるディスカッションタイムを設け、「学生の意見」、「生の声」を聞く機会を増やす試みも行っています。

また、1年生は、新カリキュラムに移行してから2年目の学年となります。以前のカリキュラムでは、2年次に設置されていた交通土木工学実験という科目により、本学科所属教員の専門科目やどのような分野で活躍されているか

色の異なる技術管理という得体の知れない(?)仕事。ここで意外と求められるのは、相手に応じて物事をわかりやすく説明する能力。研修の講師を頼まれるも、久しぶりで緊張して納得の行くしゃべりができず、しょんぼり帰ってきたこともあった。卒研や修論発表は、研究内容そのものよりもむしろ、最後の発表が大事なかもしれない。

さらに、さっき技術と言っておきながら、法律の知識、というより読解力も求められる。事務屋さんと同等に渡り合うためにも、技術屋の弱点のカバーが必要である。

このように、ソフトからハードまで、何でもこなせる能力が求められている。学生時代に得た専門知識自体は直接役に立たないかもしれないが、その過程においていろいろ吸収できると思う。

そして何よりも、地元を愛し、地元の役に立ちたいという心のある人。こんなとりとめのない文章しか書けなくても(本当は困るけど)何とかできるので、採用試験を受けてはいかがだろう。一次試験に受かったら、あとは面接で熱く語れ!

授業を通して知ることの出来る科目がありましたが、新カリキュラムでは、設置科目変更のため交通土木工学実験がなくなり、1、2年生にとって本学科の教員がどのような研究を行い社会貢献をしているかを知る機会が大変減ってきています。そこで、新しい試みとして1年生を対象に研究紹介セミナーを行っています。毎回、研究紹介を20～30分行い、その後質問時間を設けていますが、積極的に質問をする学生が多く、予定の時間を超えてしまうこともあります。参加は自由ですが、毎回100名程度の参加者があります。これまでの研究紹介は、プロブカーに関する研究、交通荷重を受ける地盤の力学特性や環境負荷軽減を目指した新技術に関する研究、シミュレーションによる交通計画のアプローチなどについて行ってきました。今後も、月に1～2回のペースで行う予定です。

## 入学試験の最近の状況

天野光一・轟 朝幸(入試委員)

理工学部では、従来からの「一般入試(A方式)」に加え、センター試験を利用した「一般入試(C方式1期)」および「一般入試(C方式2期)」、本学部独自の個別学力試験とセンター試験とを併用した「一般入試(CA方式)」

のほか、「自己推薦入試(AO方式)」、「公募制高校長推薦入試」、「指定高校推薦入試」、「付属高校推薦入試」など、多様な受験機会を多数用意しています。

社会交通工学科では、自己推薦入試(AO方式)や公募制高校長推薦入試において、社会交通工学を学ぶ志望動機の明確さを積極的に評価したり、一般入試(C2方式)において、理系・文系教科にかかわらず得意科目を特に重視して評価したりと、受験生の多様な資質を評価できる試験内容を採用しています。

18歳人口の減少や理工系離れにより、理工系を志願する受験者数が減少している上に、4月から国立大学が独立行政法人化されることで、大学間での競争が非常に激化しています。本学科では、優秀な受験生を確保するために、受験生に社会交通工学科のユニークな点や将来性、学科に対する社会的ニーズの大きさを理解してもらえよう、高校訪問やパンフレット配布などの広報活動を積極的に展開しています(本年度訪問した高校は下記の通りです)。是非、社会交通工学科のPRをよろしく願います。

入試に関する情報は、下記のホームページをご参照下さい。

<http://www.cst.nihon-u.ac.jp/nyushi.html>

資料等の請求、ご質問ご相談は、下記へお気軽にお問い合わせ下さい。

理工学部入試事務室

Tel：03-3259-0578

E-mail：nyushi@adm.cst.nihon-u.ac.jp

### 高校訪問(訪問した教員名)

八千代松陰高等学校(伊澤、江守)

千葉県立八千代高等学校(伊澤、江守)

秀明大学八千代高等学校(伊澤、江守)

千葉県立鎌ヶ谷高等学校(岩井)

千葉県立船橋東高等学校(岩井)

千葉県立船橋西高等学校(岩井)

千葉県立船橋旭高等学校(岩井)

千葉県立松戸六実高等学校(岩井、安井)

日本大学三島高等学校(小早川)

千葉市立稲毛高等学校(下辺)

千葉県立千葉西高等学校(下辺)

千葉県立磯辺高等学校(下辺)

日本大学高等学校(下辺)

佐野日本大学高等学校(轟)

日本大学習志野高等学校(轟)

長野日本大学高等学校(轟)

長野県立長野高等学校(轟)

札幌日本大学高等学校(藤井)

日本大学三島高等学校(藤井)

古河第三高等学校(藤井)

流通経済大学付属柏高等学校(藤井)

日本大学習志野高等学校(星埜)

日本大学豊山高等学校(宮森、峯岸)

東京学館高等学校(安井)

土浦日本大学高等学校(安井)

## 最近の就職状況について

藤井敬宏(4年生担任)

文部科学省では、2002年度の大学卒業者の就職状況について、卒業者の11%が大学院進学、57%が就職、就職も進学もしなかった学生が22%、フリーター・アルバイト等が4%と紹介し、就職率の低下と共に「定職に就かなくても構わない」という傾向が懸念され、本年度もほぼ同じ傾向を示していると指摘しています。

理工学系の就職状況に着目すると、バブル崩壊後の景気停滞状況から、若干経済の上向き傾向がみられ、今年度は全国の理工学系卒業生の75%が進学先および就職先が内定したと報じられています。しかし、「定職に就かなくても構わない、就職先をしばりきれない」という学生の割合も増加傾向にあるといわれています。また、1996年に廃止された「就職協定」以降、民間企業の就職内定時期が年々早まってきているといわれています

図-1は本学科の最近の就職内定率の状況を示したものです。就職協定が廃止された当初、1997年では6月に内定する学生が中心でしたが、ここ2年間で見ると、学生の就職活動時期が4年生から3年生の後期に前倒しされるようになり、結果として内定時期が6月から4月へと2カ月ほども早くなってきています。

学生の就職活動および企業側の求人対応もここ数年来変化してきています。従来、理工学系の就職は、企業と大学との信頼関係に基づいて、学生は学科から推薦を受け、学部長推薦状を取得して企業に紹介されるケースが中心でした。しかし、企業側において学部長推薦状を要求するケースが減少してきており、昨年度は21%、今年度はわずか11%であり、多くの学生が推薦なしで内定しています。学科への求人数は、今年度一人当たり6社に相当する700社以上いただきましたが、学生の就職活動の中心は、「リクルートナビ」に代表される就職情報により行う傾向に移行してきています。就職情報はビジネスとして企業の学生採用活動をアウトソーシングの形で担うようになり、現在では、採用担当まで行うコンサルタント事業を実施するまでに変化してきています。そのため、就職活動は、インターネットにより希望職種・企業の検索、企業のホームページへのアクセス、説明会へのエントリーや採用試験の応募、および履歴書に相当する個人情報の提出、等々を行う形態になってきています。企業側は、この就職情報により就職希望の学生状況が極めて容易に入手できるようになっています。つまり、学生皆さんがアクセスした時期や興味ある会社の情報などが逐次収集されていますので、希望する業

種が極端に異なっている場合など、その学生の就職志向に問題ありと見られるケースも出てきます。安易な利用は謹んで就職情報ホームページを利用する必要があります。

図-2は、学生の就職業種の変化を示したものです。1980年代には、卒業生の25~30%が建設会社に就職していました。しかし、バブル崩壊以降の景気低迷状況の中、その割合は年々減少し、今年度建設会社に内定した学生は約8%にまで減少しています。また、80年代に約20%を占めたコンサルタントも本年度は、昨年度の3%よりは持ち直したものの6%に留まっており、建設業界の多くの問題が顕在化しているといえます。公務員の状況を見ると、公務員希望者が増加して年々狭き門となり、20%近くから5%に減少しています。理工学部では、公務員講座や模擬試験を年間スケジュールに基づいて駿河台・船橋の両校舎で実施していますので、学生個人の積極的な参加意思と努力が必要となってきています。

最近の傾向としてシェアを伸ばしてきたのは、重量品を輸送する際の輸送計画や配送システムを担当する運輸とコンピュータのシステム設計・管理を担当する情報の業種で、それぞれ約10%程度を占めるようになってきていま

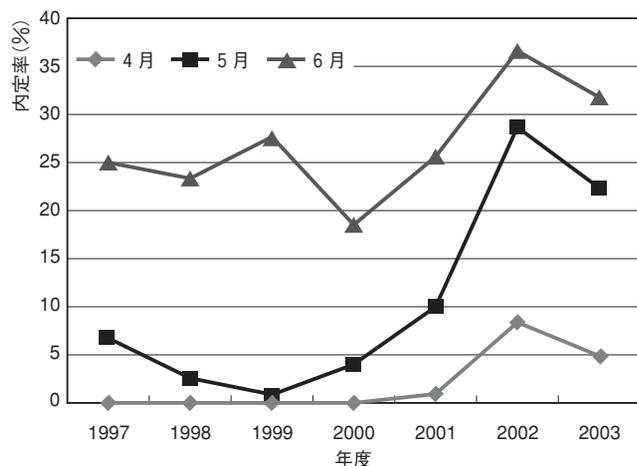


図-1 年度初期の内定率の変化

す。また、不動産や商社等、幅広い業種に進む学生も増えてきています。社会交通工学科は、人・物・情報の移動する空間を安全に、円滑に、快適に確保して運用する技術等を学べる学科です。皆さんの生活とも密接に関係した学科です。そのため、就職先も他学科にない幅広い分野に進むこともできますので、就職業種の方向性をしっかりと考えていきましょう。

しかし、最近、就職をしない学生、消極的な学生が年々増えてきていると記しました。この傾向は、本学科や理工学部だけの問題ではなく、全国の学生に共通のものといえます。現在、理工学部では、就職カウンセリングの対応を含めた検討も進めていますが、学科教員全体で学生皆さんの就職活動をバックアップしていきますので、遠慮なく相談に足を運んでください。就職戦線は、すでに始まっています。現在、3年生を対象にインターンシップ制度を利用する企業も急増しています。就職事情は、インターネットや企業の取り組みにより、これからも変化していくと思いますが、氾濫する情報に踊らされることなく、じっくりと将来の夢に向かって対応していきましょう。

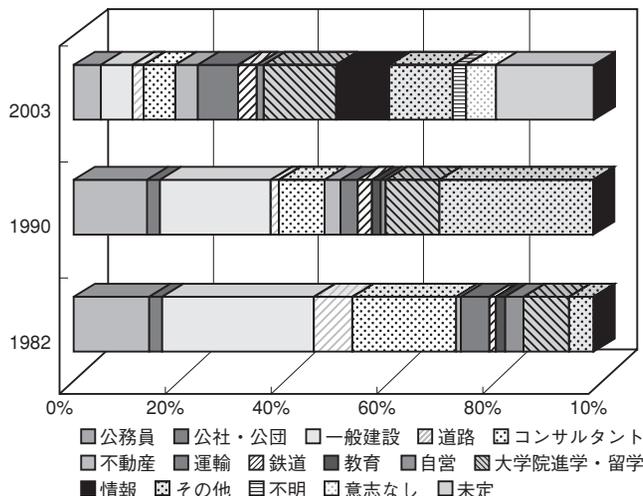


図-2 就職業種の推移

### 原稿投稿のお願い

OBからの忌憚のないご意見は、教員、在校生にとって大変重要なルートガイダンスです。是非、下記要領で原稿をお送り下さい。

#### 記

1. テーマ：近況報告、交通に関する話題、学科・教職員・学生に対するご意見など。
2. 文字数：600字前後（大体1／4頁を目安に下さい）。良い写真などがございましたら併せてお送り下さい。
3. 提出先：メールの場合：fukuda@trpt.cst.nihon-u.ac.jp  
FAXの場合：047-469-5355
4. 提出期限：随時

### 編集後記

年末から日本は、自衛隊のイラク派遣に揺れていましたが、そこで話題となっていたのが首相の国民に対する説明責任ということと、もう一つ自衛隊の定例記者会見の実施問題でした。どちらも、情報の管理と情報の開示のバランスの問題だったかと思いますが、イラクの問題に限らず、情報化の中ではどこでも同様の問題がついて回ります。

交通 Bulletin も、学科やOBの情報を、在校生、ご父母あるいは社会の方に広く開示する必要があるということから、一昨年再刊しました。幸いにも、学科には管理しなければならない情報(?)はあまりありませんが、十分情報開示になっているのかということに関しては、気になるところです。(福田)